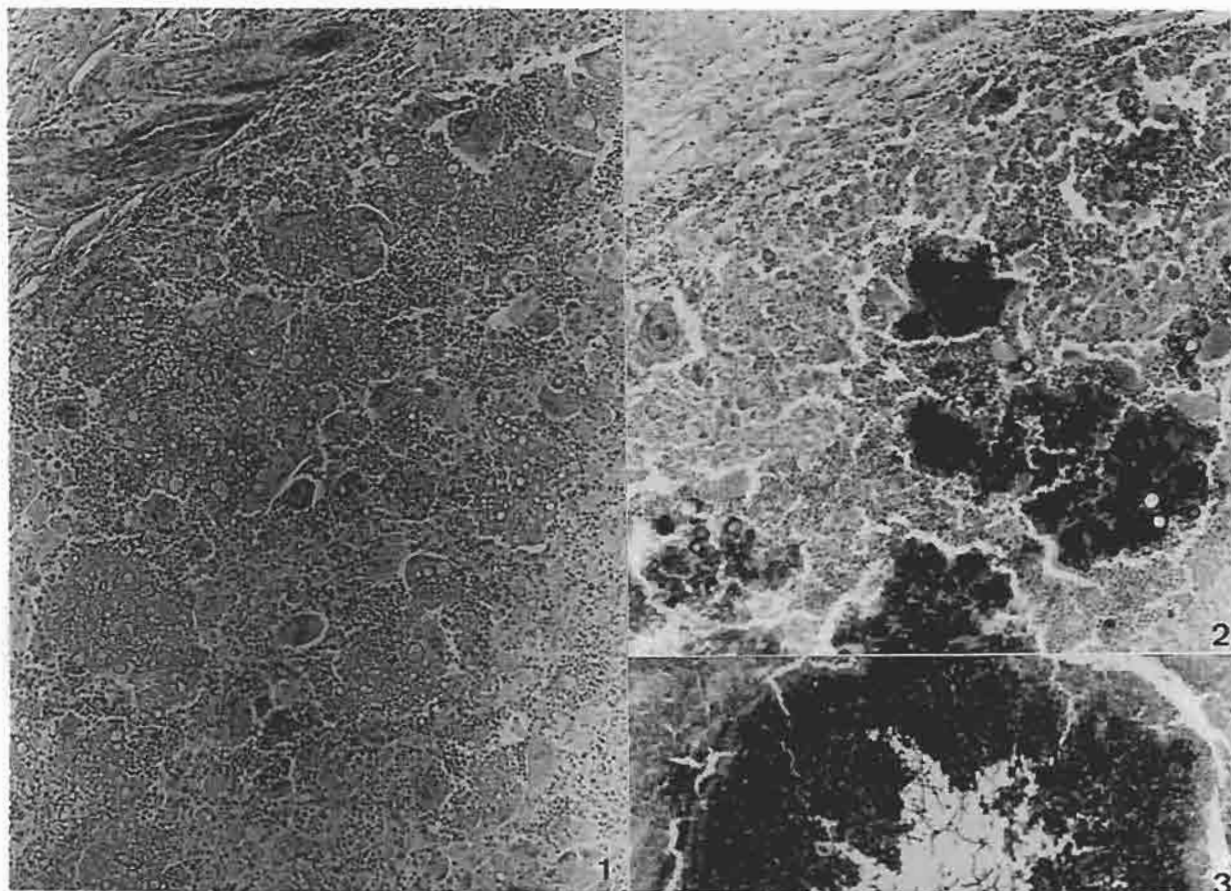


猫の皮膚

宮崎大学農学部家畜病理学教室出題 第34回獣医病理学研修会標本No.609



動物：猫（日本猫），雌（避妊手術済み），5歳。

臨床事項：1993年4月12日某動物病院で生検により腫瘍と診断されたため他の動物病院へ上診。稟告によると1ヶ月ぐらい前から左側肛門周囲が結節性（直径3.5cm）に隆起し、赤く腫れて痛がったとのことであった。弾力はわずかで、肛門周囲腺と連続しているように思われた。圧迫することにより瘻管部から内容物がでた。麻酔処置により摘出し、10%ホルマリンで固定後、組織標本およびパラフィンブロックが病理診断のため当教室に搬入された。

組織学的所見：真皮から皮下にかけて多数の大小不定形の凝塊が島状に観察された(写真1)。それらは芽胞様、球状で比較的厚い壁をもち、内腔が拡張性、多性屈折性で多形性の真菌性菌糸からなっていた。これらの菌糸塊はエオジン好性無構造物質の中に埋もれて存在した。この物質はいわゆるSplendore-Hoeppli material(感染因子または寄生虫に対する抗原抗体複合体)に類似して棍棒体がみられ、大きな顆粒(凝集)を形成していた。このような菌糸に関連する凝集形態は組織学的に菌腫(mycetoma)の特徴的病変である。顆粒周囲には薄く好中球がふちどるように浸潤し、その外側を多数のマクロファージと巨細胞

が取り囲んで、いわゆる肉芽腫性炎を呈していた。菌体はPAS染色強陽性(写真2)及びグロコット染色陽性で、部位によっては真菌の小分生子も多数みられた(写真3)。その他、表皮にはacanthosisがみられ、一部に潰瘍性変化や血管周囲炎がみられた。

考察及び診断：猫皮膚糸状菌性菌腫(feline dermatophytic mycetoma)の真菌は毛包に存在するものとは類似していない。主にネコに感染する皮膚糸状菌は3種存在するが、菌種からは一般に*Microsporium canis*(MC)が分離されると記されている。今回は直接塗抹の形態により、当患者の被毛にMCの存在が確認された。MC(小孢子菌(属))は通常、小孢子が被毛を石垣のように囲むのが特徴とされている。しかしながら、擦過傷などの外傷から皮膚真皮内に侵入することによって菌腫をつくる。猫皮膚糸状菌腫は皮膚糸状菌によっておこるまれな真皮及び皮下織の真菌感染症で、一般には免疫機能不全が病巣の発達に重要な役割を果たすといわれるが、ペルシャネコでは例外的によくおこるとされる。Dermatophytic mycetomaの組織形態は特徴的で、他の真菌類とは区別される。提出標本は「(MCによると思われる)猫皮膚糸状菌腫」と診断した。